

堆積の器

—身体や時間や身体のものさしとなる建築—

21419026 殿前 莉世
指導教員 宮 晶子 准教授

スケール 物質性 時間性
部分と全体 漂着ゴミ 葛西海浜公園

1. 研究の背景と目的

建築は、人にどこまで影響を与え続けられるだろうか。建築はミクロなスケールで見れば目地の切り替わりが気になってしまうようなものであるし、マクロなスケールで考えれば地球にできたふきでもののようなものでもある。建築は極小なものから極大なものまで無限のスケールを包含しているが、私たちが普段認識している建築の範囲は限界がある。視点を変えるだけで建築の意味はいかようにも変化する一方、すべてを意識するにはあまりにも甚大であるために、私たち人間はそこから自分のくみ取ることのできる範囲を無意識に決めて体験している。

普段設計者は 1/200、1/100…といったように、適宜建築に机の上で あるスケールを設定して検討を行う。スケールを下げれば巨視的な視点で建築の在り方が分かるし、スケールを上げれば家具の収まりやディテールを検討することができる。そんな風に、設計者は意識的にスケールを行き来しながら検討を行う。一方で、建築を使用する側にとっては、こうしたスケールを行き来する体験はなかなか無い。そんな、包含しているスケールを体験として実感できるような建築を考えたい。

ばらばらなスケールの断片をちりばめて、それらがある全体性をもって立ち現れる。建築によって繋がれることで、すべてのものが地続きであることを実感することができる。氷山の一角という言葉に示されるように、私たちが見ている世界が局所的なものでしかなくてその全貌が意識されることはない。

すべての断片があるきっかけをもってつながれて全体へと意識が及んでいくように、分断の時代と言われる現代において、建築がつながりを意識させる役割を担う。



図1 コンセプトスケッチ

2. 敷地

葛西海浜公園西なぎさ
緯度: 35度 38分 21.89秒 経度: 139度 51分 2.92秒



図2 葛西海浜公園

葛西海浜公園は葛西臨海公園のさらに沖合に広がる天然の三枚洲という干潟を保護・再生するために作られた公園で、西なぎさと東なぎさの二つの三日月形のなぎさが作られている。東なぎさは野鳥などの生態保護を目的として立ち入り禁止となっている。スカイツリーや富士山などのランドマークが一望でき、1996年には「日本の渚百選」に選ばれた。また 2015年から、夏季に葛西海浜公園海水浴体験が行われている。1989年に開業して今年で30年目を迎える。

川と海の境目に位置しスケールの切り替わる場所であること、人間によって海に造成された、ある時間に大地の改変を受けた場所であること、満ち引きという時間による水位の変動があること、観覧車や飛行機から俯瞰できること、という理由からこの敷地を選定した。

3. リサーチ

3-1 スケールについての考察

建築が持っているスケールについて考える。

ひとつには、形をもった存在としての「物質性」がある。そしてもうひとつには、時の経過に伴って変化していくような、「時間性」がある。



図3 建築に関わるスケール

(i)物質性

建築のもつ物質的なスケールとしては、目に見えるモノとしての素材と、身体が体験できる対象性がある。建築は、ミクロな視点では建材の原料まで考えるものであるし、マクロな視点では定着する大地ですら建築に関わる物質性である。それらの物質に対して、人は意識の中で身体のものさしを変化させながら建築を体験している。

(ii)時間性

建築は、ある場所に建てられその地に定着するためにある時間を包含している。それは人間が建築を体験するシーケンスであったり、ほかには建築に作用する環境も時間に起因するものだ。人間にも顕著に感じられるのは一日の中で起こる太陽高度の変化や気候、一年のなかで移ろう季節の変化がある。目に見えて現れにくい要素としては、その場所が持っている記憶や歴史であったり、長い時間をかけておこる浸食や物質の経年変化などが挙げられる。

3-2 環境問題

敷地が面している東京湾は遠く太平洋に続く。今地球規模で嘆かれているのが海洋ごみの問題である。人間が出したごみが川の上流から水とともに下っていき、海へ流れていく。太平洋には太平洋ゴミベルトと呼ばれるゴミの区域があり、深刻な環境問題となっている。西なぎさにも荒川上流、そして東京湾からのゴミが絶えず漂着し、現在はボランティアによる清掃活動が行われている。

4.設計

対象のスケール・身体スケール・時間のスケールの3つのものさしを起点として設計を行った。

4-1 対象のスケール

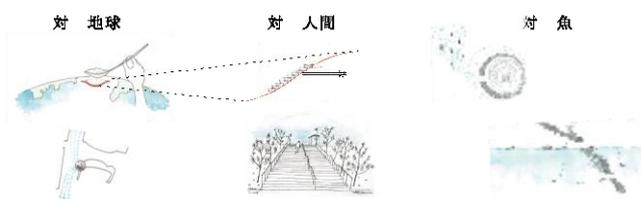


図4 ダイアグラム

地球に対して、器を据えるようにくぼみをつくる。すると建築によって海流に淀みが生まれ、水が流れ込んでくる。このくぼみを200mmの段差で積分するようにして人間スケールの起伏をつくる。階段の蹴上ほどのリズムは身体的な記憶に結び付く。人間のスケールに身体化されたところで、最後に小さな隙間を開けていく。裏側だった世界が器のなかへと接続され、小さな生き物や物質が入り込む。こうして異なるスケールの対象を器はつなぎとめていく。

4-2 身体スケール

普段人間は、視界のどこかに地平線を探しながら自分の身体を意識の中で縮めたり拡大したりして場所を体験している。1本しか存在しない地平線に対して、建築によって水平線が幾重にも重ねられたとき、スケール感覚は揺らぎ、体験は個人の身体に委ねられる。階段の蹴上寸法を基準とした200mmの段差を積み重ね、水平方向には幅を、垂直方向には勾配を操作しながら動線や場をそれとなく規定していく。



図5 勾配と場の関係

4-3 時間のスケール

1日の中で潮汐によって体験する場所が変化しながら、漂着物が取り残されていく。1年の四季の中で表情を変えながら長い年月を経て建築は環境に浸食されていく。100年後、海面水位が80cmほど上昇する人間の入れる場所が海に埋もれていく。1000年後にはコンクリートが朽ちて海に沈み、地球の一部となる。人間のために大地を改変したこの土地に建つ建築が、やがて人間のためではなく環境の一部となって大地に還元されていく。

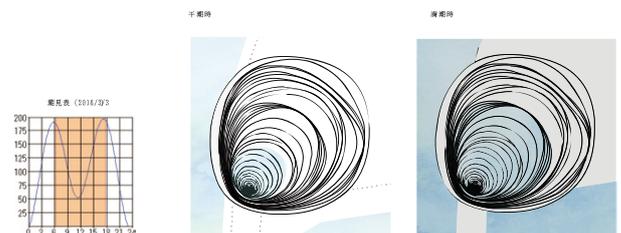


図6 1日の潮汐で変化する平面

足元では魚が生き生きと泳ぎ回っていて、少し離れたところでは誰かが鼻歌を歌っていて、静かになったかと思えば海の潮騒が聞こえてくる。建築内に異なるスケールのものや行為がちりばめられながら、すべてが地続きで、等価に存在している。そんな風に小さなものから大きなものまで、断片が建築によってつながれ、堆積したモノや時間と対峙する。200mmの些細なリズムは個々の身体に無意識に染みついてしまっていて、建築がささやかに、人の意識に及んでいく。

主要参考文献

- 「ランドスケール・ブック」石川初,LIXIL出版,
- 「東京湾」東京湾海洋環境研究委員会,恒星社厚生閣
- 「海辺の環境学」,小野佐和子 宇野求 古谷勝則,東京大学出版会